

見ぬ人見ぬ世見ぬ境

—幻想された場所として—

王 軍 合

序

「境さかひ」という言葉（歌論用語）は中世歌論において非常に重要な役割を果たしている。その表出は歌論書は勿論、勅撰、私撰集の序文・跋文、歌合判詞、和歌の古注釈類まで遍在する。多少の揺れも見せながら最も基本的な使用パターンは「境に入る」といってよいのであろう。例えば藤原定家の『毎月抄』、藤原俊成の『古来風体抄』に次のように見られる。

さて、この十躰の中に、いづれ有心躰に過ぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。極めて思ひ難う候。とざまかうざまにてはつやつや続けらるべからず。よくよく心を澄まして、その一境いちきょうに入りふしてこそ稀によまるる事は侍れ。されば宜しき歌と申し候は歌毎に心の深さのみぞ申しためる。あまりにまた深く心を入れむとてねち過ぐせば、いりほがのいりくり歌とて、堅固ならぬ姿の心得られぬは、心無きよりもうたてく見苦しき事にて侍る。この境がゆゆしき大事にて侍る。なほなほよく斟酌あるべきにこそ¹⁾。

この倭歌は、ただ仮名の四十七字のうちより出でて、五七五七七の句、三十一字とだに知りぬれば、易きやうなるによりて、口惜しく人に侮らるる方の侍るなり。なかなか深く境に入りぬるにこそ、虚しき空の限りも無くわたの原の波の果ても究めも知らずは覚ゆべき事には侍るべかめれ²⁾。

しかし境は、歌論用語の役割を担うと同時に歌語でもある。万葉集以降から、

境という歌語が、絶えず和歌に読み込まれ、中世和歌に至ってさらに一段と重要性を増したと考えられる。では、抽象化した歌論用語としての境は、歌語としての境と、どの点において一致して、両者が重なって一つの世界を織り成すのであろうか。もし接点があるとすれば、どこにあるのだろうか。中世歌論においても、新古今時代和歌の歌風においても、これは極めて実質的な問題点ではなかろうか。本稿は歌論の境と歌語の境の橋渡し役を勤め、その接点を照らし出してみたい。

一、 境の使用パターン

本稿では境の使用パターンを、「境に入る」、「思ひやる境」、名所、釈教の四つに分けみた。名所（歌枕）のそれを除けば、ほぼ他の三つの分類にその対応されると思う詩語、漢語表現が見つかる。例えば「境に入る」という歌語に対して、「未入其境」（慈円『拾玉集』初度百首跋文）、「思ひやる境遙かに」（古今集524）の歌語表現に対して、「遥囑煙霞境」（元久詩歌合³⁾二番左、摂政）の漢詩句が対置され、他に「境をぞ見る」（拾遺愚草792）に対して、「観境」（摩訶止観）の詩語、漢語が対置されるように、歌語としての境は、深く詩語と結び付いてあることが分かる。「境に入る」（入境）「思ひやる境」（思境⁴⁾）の用例が圧倒的に和歌の中で多用されるのも、詩論における応用、愛用に関係すると見え、この分類は基本的に詩語との関係を考慮した意味上の使用パターンと説明しておく。

境の使用パターン1「境に入る」

	歌 語	例	歌	作 者	・作 品	歌番号
1	境に入る	夕立ちて夏はいぬめりそほちつつ秋の境にいつか入るらん		したがふ	古今六帖	121
2	境に至る	夕立て夏はいぬめりそほちつつ秋の境にいまや至らん		同上	同上	509
3	境を越ゆる	ふる雪を空にぬさとぞ手向けける春のさかひに年のこゆれば		紀貫之	貫之集 新勅撰	89 422
4	境に吹きこし	幻に誘ふかぜよと思ひしにうちのさかひにふきこしてけり		行尊	行尊大僧 正集	86

5	境に来る	花の散ることをなげくとせしほどに <u>夏の境に春はきにけり</u>	藤原顕季	六条修理大夫集	200
6	境越え過ぎ	国かはる境いくたび越え過ぎておほくのためにおもなれぬらむ	藤原良経	月清集	1473
7	境なる	山かくす春の霞そうらめしきいつれ <u>都のさかひ</u> なるらん	乙	古今	413
8	境を占めて	七十の境をしめて待つほどはをしまですぐる年の暮れかな	成茂	宝治百首	2386
9	境を別れ	けふは猶かすみをしべとも舟の春の境を別れずもがな	定家	拾遺愚草	1520

使用パターン2「思ひやる境」

1	思ひやる	思ひやる境 <u>遙か</u> になりやするまどふ夢ちにあふ人のなき	読み人しらず	古今集	524
2	境遙けき	おぼつかぬ境はるけきたび人のながるのうらにながみする	定頼	定頼集	155
3	境遙か	法のため身にはつつがのなきのみか <u>遙か境</u> のうちもさそひき	藤原忠通	田多民治集	193
4	眺遣る境	眺めやる都の境はつかりの鳴く山とおき峰の白雲	能行	洞院百首	1744
5	しらぬ境	草枯れの野原の駒もうらぶれてしらぬ境の長月の空	定家	拾遺愚草	133
6	境も知らぬ	都人帰る山路は跡絶えぬ境も知らぬ秋の夕霧		建保百首	997
7	遠き境	遠き境をまつ恋といへる心を頼めても遥けかるへき帰山いくへの雲の下に待覧	賀茂重政	新古今	1130
8	境異なる	悲しきは境異なるなかとしなき玉までやよそにうかれん	定家	拾遺愚草	873
9	見ぬ境	<u>みぬ境</u> しらぬの山も押し並べて同じ光の月ぞ澄むらん	伏見院	伏見院集	1005
10	境を見る	いさぎよく磨く心の曇らねば玉しく四方の境をぞ見る	定家	拾遺愚草	792

使用パターン3「釈教歌」

1	境に入る	いとひいでてむろの境に入りしより聴き見ることは悟りにぞなる	西行	聞き書	147
2	三つの境	流転するみつの <u>さかひ</u> ににたるかなをしみし春も別れぬるは	定家	拾遺員外	258
3	三つの境	世世をへてもとの都をたづぬとて三つの境にまよひぬるかな	慈円	拾玉集	675
4	境	境こそ数にはあらぬ国なれどあきつしまにぞ法はひろまる	光俊	夫木	14128

使用パターン4「名所の境」

名所としての境	例	歌	作者	作品	歌番号
1	堺	名にしおふ境や何処明石渦猶浦遠く澄める月かな	藤原信実	続古今	410
2	境川	舟も無き岩波高き境川水増さりなば人も通はじ	藤原顕季	六条修理大夫	267
3	境の浦	の海の <u>さかひ</u> の浦のおきつもを春のひぐらしかづく海人	権律師頼尋	夫木	11632

本稿は、使用パターンの「思ひやる境」に含む「知らぬ境」「境異なる」「遠き境」「境をぞ見る」「見ぬ境」などを論の中心に扱う。また歌論においても歌語の使用パターンにおいて、藤原定家がこの語もっとも特別な思い入れが見えるので、以下、藤原定家和歌での使用例を具体的に挙げて論を進めたい。

二、見ぬ境と見ぬ世

最初に使用パターン2の8番としてあげた藤原定家の『六百番歌合』の歌を検討する。

悲しきは境異なるなかとしてなき玉までやよそにうかれん 拾遺愚草 873

この歌は恋五の「遠恋」を題として、十七番左、勝とされたこの歌は、寂蓮の右歌と番になっていた。

忘れずよ幾雲井とは知らねども空行く月の契りばかりは 寂蓮 874

判者俊成は、定家歌を「左歌、少し砕けたるやうには聞え侍れど、心あるにや侍らん」と概ね評価していた。意味上「異境」にあたる従来の歌語なら、「境遙かに」（古今・恋一524）、「知らぬ境」（後拾遺・1158慶範）「遠き境」、のどちらかが当てはまるが、定家はその漢語を、そのまま和文風に言い換えただけにした。従来の歌語の視点から眺めれば少々特異だと言わざるを得ない。久保田淳氏は新大系本（岩波書店307頁）下注にこの「境異なる」を、「幽冥境を異にする」⁵⁾と解し、「砕けたるやう」の文言を「死者の魂を題材にした」ためであると解説した。趣旨として「死んだ後までも恋する相手を魂は慕うと詠む。源氏物語で桐壺更衣の亡魂のありかを帝が求めた話の裏返しの内容」と付け加えた。「亡き玉までやよそにうかれん」を読みの重心に置くのは久保田淳氏のほかに、塚本邦雄、松井律子氏も同様な読みを下している。この解釈は定家の

つてに聞くちぎりもかなし相思ふこずえの鴛鴦のよなよなのこゑ 閑居百首

の歌意に近い。これは死後の世界でも、相変わらず恋人との契りをかたく誓い合う意味の歌柄である。『源氏物語』桐壺巻の歌に「たづねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」とあり、そこでは楊貴妃を恋慕するあまり、その亡き魂を蓬莱仙宮に求めさせる玄宗皇帝の話が下敷きになっていることは周知の通りである。873番（六百番歌合）の定家歌は、「亡き魂」を読み、の重心を置けば、『源氏物語』桐壺帝の歌、閑居百首399番の意味に近く、本当の意味では「見し人」への愛情と希求を歌うものとなる。だが『六百番歌合』恋五は13番～18番まで、「遠恋」という題の下で、計六組の12人（12首歌）の殆どが空間の距離感によって恋情を託した。つまり恋人との間に空間的距離は遠くとも必ずしも死んでいたと明言したのではなく、その関係を「知らぬ中」（15番季経）、「通はぬ中」（20番兼宗）、「中の隔て」と歌う。その中にあって定家の歌は、「異境なり思ふ人の住所遠境なれば恋しにてあらば亡き玉しひまでうかれありかん事かなしきとなり」（拾遺愚草抄出聞書⁶⁾）と古注にあるように、遠い境を隔てたからの理由で、恋死した場合を、「なき玉までもよそに浮かれん」と読んだ。この古注はやはり重心を空間的距離においてあって、必ずしも死んだとはいえない。『拾遺愚草俟後抄』⁷⁾では「境地各別なる中の悲しみは、げにたぐひなき事なるべし。されば亡魂までもあらぬ境にやうかれむと也」とあるように、地理、距離の遠さが詩眼であるといえる。『新古今集』卷第十二・恋歌二に「遠き境を待つ恋といへる心を」の詞書を持つ歌もそうである。

頼めてもはるけかるべき帰山幾重の雲の下に待つらん 1130 賀茂重政

さらに建保名所百首に見られる歌例がある。

還る山（越前国）

都人かへる山路は跡たえぬさかひもしらぬ秋の夕霧

『題林愚抄』（室町中期）⁸⁾は『六百番歌合』の題「遠恋」を含め、俊成の「恋遠人」、新古今の「遠き境を待つ恋」、それに様々な「遠情」の歌と共通の歌題に括り、次のように解釈した。

遠情といふ題はとほくおもひやるなり、たとへば月ゆゑさらしなをばすておもひやり、もろこしえすがすみかなどまでも心をはるかにかよはして、とほきさかひを思ひやるなり。

要するに「遠恋」と「遠情」の歌題が「遠き境を思ひやる」を本意とするのは普通で、新古今時代の恋歌では、恋人同士の空間的距離を隔てることを、「遠き境」「境遥かに」「知らぬ境」などによって表現することは主流であり、特徴でもあるが、定家の歌も例外ではない。ただし定家が「境異なる」仲としての歌った恋の相手は誰なのか？その居場所である境はどこなのかを、考えなければならぬ。「さかひ異なる」歌に対する久保田、塚本、松井三氏の解釈は一理あるものの、その解釈は恋人の死んだ世界に限定しすぎた恨みがある。それによって藤原定家が幻想した神女との関係性を閉じてしまうのではないか。ここで定家が意図した「異境」は、「見ぬ世」の「見ぬさかひ」でもあることを指摘したい。

例えば同じ『六百番歌合』の歌

唐土の見ず知らぬ世の人ばかり名にのみ聞きて止みねとや思ふ 恋一・十八番・聞恋

主やたれ見ぬ世の色を写しをく筆のすさびにうかぶ面影 恋九・十三番・寄絵恋

そのほかに

心のみもろこしまでもうかれつつ夢ちにとほき月のころ哉 1047 続古今

見しはみな夢のただちにまがひつつむかしは遠く人はかへらず 「文集百首」 3285

これ等の歌例に見られるように、定家が思っていたのは「唐土の見ず知らぬ世の人」であり、「異境」とは具体的に「もろこし」を指していったと見える。「見ず知らぬ世の人」「見ぬ世の色」はもろこしの女性である。いにしへの神女への憧れが見えてくるところに、その恋人が「見ぬ世」の人であるかどうかを見極めるポイントだと思う。かつて久保田淳氏が『新古今歌人の研究』⁹⁾で、定家の歌二首

心こそもろこしまでもあくがる月は見ぬ世のしるべならねど 初学百首41
もろこしのよしのの山の夢にだにまだ見ぬこひにまどひぬるかな 同 64

を以って、『松浦宮物語』の作者に相応しいと言ったが、ここでも定家の幻想にそのような志向性が認められた。

本来「見し人」「見し世」「見し夢」などの表現によって捉えられ、哀傷歌に歌われるテーマは単なる過去のことであった。しかし定家は単なる過去、忘却の彼方に遠ざかる昔日の思いをよみがえらせるための装置として、定家の「さかひ異なる」という言葉を用いたと思われる。そこに「見ぬ世」の人、事を自然に内包し、それらは密接不可分の関係にある、と指摘しておく。つまりさかひ異なる（異境）は、遠き境＝行きて見ぬ境＝知らぬ境＝境隔てるであると同時に、さかひ異なる（異境）は、見ぬ世＝行きて見ぬ人＝知らぬ世、見ぬ人、見ぬ恋というような幻想の連鎖がある。

定家の歌ではないが、見ぬ世の人は唐土の「知らぬ境」にある人であることを示す歌に

契りありてあひみむこともしらぬ世に儂く人を思ひそめぬる

音にのみ聞く唐土のほどだにもまた知らぬ世の人を恋ひつつ

がある。歌語「見ぬ人」によって導き出したこの「見ぬ世」は、その幻想性をそのまま受け継ぎ、定家の手で再開花したとも言えましょう。これを例証する『松浦宮物語』にこのような「見ぬ世」に呼応するような「見し世」が二箇所ある。¹⁰⁾

まづこの国の守出でむかひて、文作り、遊びなどす。人の語らふ声、鳥のさへづる音も、見し世に似ずめづらしくおもしろきに、ゆくへなかりつるながめは、少し紛れぬれど。(一、29頁)

堅く封ぜられて、「清まはり、静かなるところにて開けらるべき」よしを書きつけたる鏡なれば、この御祈りにことづけて、修法などせさせたまふとて、寺にこもりたまへるついでにぞ、この鏡を開ければ、見し世はさだかに映りけり。(三、第135頁)

前者の「見し世」は、渡唐後、かつて日本での日々とを言うものであり、後者は日本に戻ってから在唐時、鄭皇后の化身である神女と不思議な逢瀬をすごした時のことを言うものである。この呼応関係を見れば、「見ぬ世」とは神女とはまた会っていない時のことを指すと分かる。したがって歌語が、見ぬ世は、「境異なる」(又は知らぬ境)と共に定家和歌の幻想を支えているといえる。

三、見ぬ人とは誰か

平安時代の歌語「見ぬ人」は一体誰のことであろうか。平安時代の歌例から検討してみる。

世の中はかくこそありけれ吹く風の下に見ぬ人もこひしかりけり

古今集・巻第1 1恋歌一 475 (貫之集549)

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ
返し

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

『伊勢物語』99段、『古今集』巻第11恋一・476、477

わが心いつならひてか見ぬ人を思ひやりつつこひしかるらん

後撰集 巻第10 恋二、603 紀友則

見ぬ人のこひしきやなぞおぼつかなだれとかしらむ夢に見ゆとも

拾遺和歌集巻第一 恋一629 読み人知らず

これらの歌には仄めかされたヒントの風、簾などが見えても、相手の「見ぬ人」は誰なのか一向に明かさない。渡辺秀夫氏の指摘¹¹⁾によって、「吹く風の目に見ぬ」なる表現は、『芸文類聚』(巻一)、『初学記』(巻一同)何遜の「詠風詩」

可聞不可見、能重複能軽。鏡前飄落粉、琴上響余声

に由来することが既に明らかにされた。貫之の歌「吹く風の目に見ぬ」は、詩の第一句「可聞不可見」の翻案であるという。「問題は出典に止まらず、この「音に聞き」「目にみぬ」風は、ここでどんな表徴機能を有するかを問わなければならない。著しく擬人化したこの風は神話的意味で言えば「風の神」(仙風)となるのである。例えば『芸文類聚』の梁簡文帝詠風詩¹²⁾

飄飄散芳勢、汎漾下蓬萊。傳涼入鏤檻、發氣滿瑤臺。委禾周邦偃、飛駝宋都迴。

亟搖故葉落、屢蕩新花開。暫舞驚鳧去、時送樂香來。已拂巫山雨、何用卷寒灰。

梁王台卿の詠風詩¹³⁾

侵望不可識、去來非有情。乍見珠簾卷、時覺洞房清。

暫拂蘭池上、激淡玉塵生。一辨雄雌異、還惡庶人輕。

の下線部詩句は共通点として、風を少女、又は神女のように擬人化して描いているのが分かる。その風の来歴を問い質せば「幽冥より出でて」と言い、或いは「蓬萊」を下り、「瑤臺」に満ちると言うのである。その場所は、東西両方にある仙境であることは明らかである。仙境から来たその風は、その過程に於いて、玉簾を巻き揚げたり、花の香を送ったりして、また「すでに巫山の雨を払い」というから巫山神女のイメージも浸透した。梁王台卿の詩の第一句は、何遜詩と同意であることも判る。このような背景を踏まえて読むと、貫之の歌に読み替えた何遜の「吹く風の」風は、単なる自然の風ではなく、神女到来の兆候を示すものとして理解しなければならない。

平安時代は「見ぬ人」を誰それと明言しなかったが、万葉集では、おおどかに誰それと謳っている。

音に聞き 目にはいまだ見ず 佐用姫が 領巾振りきとふ 君松浦山

卷第五・883

この歌は三島王が、憶良作とする『松浦川に遊ぶ序』（巻第五852番）の一群歌に追和した形のものである。憶良の筆下、松浦佐用姫は既に『遊仙窟』に潤色され、仙女、神女のイメージが克明に見えてくる。もしこの歌に示すように「音に聞き目には見」ぬ人は神女であれば、貫之の「吹く風の目に見ぬ人」も神女の余韻が揺曳していたと言えよう。

『松浦宮物語』では、主人公氏忠が、かの神秘的な女性、蕭の女と夢の逢瀬をした時の会話に「さらば、音に聞きし巫山の雲、湘浦の神の謀りたまふか」という言葉を口にしたのも、正に音に聞き「見ぬ人」は神女であることを証明した。「見ぬ人恋し」は万葉集以降、読み慣れたモチーフであり、古今集後撰集などでは多くの歌が読まれた。中世に至って、源氏物語をはじめとする古典の物語のストーリーが、和歌の世界に浸透し、定家たち中世歌人の和歌に歌題と

なった。そしてそのような歌語は、更に「見ぬ世」「見ぬ境」によって繋ぎ、新古今時代でより鮮やかに潤色し、神女崇拜という言うべき幻想の場所へ導いたといえる。

四、見ぬさかひとはどこか

今まで、見てきた中で明らかになってきたと思うが、空間と場所を示す「境・さかひ」は、あくまで観念上のあり方である。では、上記関連の歌語「見ぬ世」の「見ぬ人」と合わせて考えれば、中世歌人が「境」という考え方で捕らえた場所の中で、最も代表的な場所はどこを指しているのであろうか。遠くを意味する唐土は、彼らが絶えずに憧れる境の一つであろう。唐土を「境・さかひ」に捉える歌は多くあるが、代表的な歌例を挙げる。

唐土は国をへだつる さかひにてわたつ海こそ道はしるけれ

弘安十年本古今集歌注・秋下

松浦がたもろこしかけてみわたせば さかひは八重の霞なりけり

風雅集¹⁴⁾ 21・後鳥羽院

こよひこそみぬもろこしの さかひまで月に心は行きかへりぬれ

文保百 1346・経継

から国の しらぬ境をへだつともかよふころのすゑはあひなん

龜山院御集遠恋 169

みぬさかひしらぬの山もおしなべておなじ光の月ぞすむらん 伏見院1005

見ぬ唐土の「異境」（さかひ異なる）は、この場合、夢舞台を設定する装置として機能する。『松浦宮物語』に典型的な例といえる。「遠恋」「遠境恋」「隔境恋」「恋遠人」などの歌題と本説がそうさせたとも考えられる。そのために主人公の母宮の口を借り「この国の境をだにいかで離れむ」と言い、主人公が遠い境へ流離う運命を予言した。物語の最も重要な核の一つ、第二プロットで、氏

忠が始めて商山の高楼で華陽公主に逢い、琴を習う時の贈答歌

雲に吹く風も及ばぬ波路より問ひ来ん人はそらに知りなき
とのたまへば、
雲の外遠つさかひの国人もまたかばかりの別れやはせし

(一、第41頁23と24番歌)

歌意は、皇女とめぐり合ったばかりなのに、暫く別れをしなければならない
悲しい場面に、皇女は雲に吹き付ける風も届かない波路の彼方より、あなたが
尋ねてくれることを、それとなく分かっておりましたとうたう。それに対して、
氏忠は自分を「遠つ境の国人」と自称し、雲の隔てる遠い国より来た私が、な
ぜまた悲しい別れに遭遇するのだろうか、いやだなと返事したのである。『松浦
宮物語』の作者は藤原定家であるのが定説であるが、そうであればなお一層藤
原定家の歌語「境ことなる」が遠き境の唐土であることが判る。かりにそうで
なくても上記歌例が示すように、中世歌人の意識の中に「もろこし」は「国を
へだつるさかひ」(古今歌注)、唐国は「しらぬ境」(亀山院)であるの認識が読
み取れるのであろう。藤原定家には(使用パターン2表)

くさがれの野原のこまもうらぶれて知らぬ境の長月の空 閑居百首 398

の歌がある。この歌の歌語「しらぬ境」は『松浦宮物語』の38番歌

見るとに姥捨て山の数添ひて知らぬ境の月ぞ悲しき

との近似が石田貞吉氏¹⁵⁾によって指摘済みである。氏忠の口によって表出した
この「知らぬ境」は勿論もろこしであるが、もう一人の神女鄭皇后との唱和の
中に流露した遠恋の情緒である。どこまでも定家の歌語「知らぬ境」「境こと

なる」はかくも主人公の口吻と相似するのであろうか。しかも二人の神女との関係においての表出をみれば、定家の「境」とは唐土であることに疑う余地がない。

ま と め

以上、歌語の「見ぬ人見ぬ世」との関連において「見ぬ境」が「唐土」であることを検討した。「見ぬ人」とは、現実の恋の相手を指すこともあるが、むしろ多くは幻想の世界に思いを馳せ、憧れの対象である仙女、神女を指すのである。特に「見ぬ世、見ぬ境」の志向性に合わせてみれば、見ぬ人は、見ぬ世の見ぬ境にある人であり、見ぬ境は、見ぬ世の見ぬ人であるとも言い替えられる。「見ぬ人見ぬ世見ぬ境」によって、中世和歌の幻想の同一性を示す所である。

藤原定家をはじめとする中世歌人が歌論で「境に入る」と云うときに、勿論禪修業のように、ある特定の心的状況、精神状態に集中するようと呼びかけるのだが、これは決して歌語の境とは無関係ではない。『新古今和歌集』仮名序に「かくのごとく知らぬ昔の人の心をもあらはし、行きて見ぬ境の外のことをも知るは、ただこの道ならし¹⁶⁾」の一節があり、これは、その後の勅撰集仮名序に承継されていく認識の一つである。そこでは和歌の効用として、知らぬ昔の人（見ぬ世の人）の心、「行きて見ぬ境」を知ることが可能であると説明している。この意味で歌論の「境に入る」とは、歌語の「見ぬ人見ぬ世見ぬ境」によって幻想される幽玄な世界に入ることであるといえる。歌論の境と歌語の境の接点は、幻想された場所にある。

【資料、注釈】

- 1) 小学館日本古典文学全集『歌論集』藤平春男校注 第515～516頁
- 2) 同注1、有吉保校注訳 第29頁
- 3) 群書類従巻第223
- 4) 空海の『文鏡秘府論』に所引王昌齡『詩格』「如其境思不来、不可作也」の語があり、また「意境」と命名される。
- 5) 新古典大系『六百番歌合』第307頁。塚本邦雄著『恋—六百番歌合—』（文芸春秋）は「定家は幽冥境を隔てての交霊を歌った点記憶に値する」と久保田氏と同様の解釈を示した。第275頁

- 6) 石川常彦校注『拾遺愚草古注』上、中世の文学 三弥井書店、第170頁
- 7) 『拾遺愚草古注』上、同注 6、第244頁
- 8) 『和歌題林愚抄』とも言う。室町時代中期成立の類題歌集。撰者は山科言緒と言われるが不詳。
- 9) 東京大学出版会、1973年、
- 10) 小学館新日本古典文学全集 樋口芳麻呂校注『松浦宮物語・無名草子』、第29頁
- 11) 『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、1991年 第一部
- 12) 梁簡文帝、蕭綱（503～551）。梁の第二代目の皇帝、昭明太子蕭統の弟、徐陵に下命し、艶詩集『玉台新詠』を編纂させた。
- 13) 生平不詳
- 14) 後鳥羽院御集・詠五百首和歌、第五句「朝霞かも」
- 15) 『新古今世界と中世文学』上、第二編の第二、北沢図書出版、昭和47年6月 第331頁
- 16) 小学館新日本文学全集『新古今和歌集』峯村文人校注・訳 第35頁

* 討議要旨

江口季好氏は、湯川秀樹の古典文学論における藤原定家と素粒子についての関連についての言説について、どういった理解ができるのかという点について質問し、発表者は湯川秀樹の論を未読であるため現時点では検討ができなるとした。横井孝氏は、発表者が言及した『源氏物語』の例を、それが「見し人」との別れと捉えたのかということを確認し、発表者は「見し人」は生きている人も死んだ人も「見し人」とすることができるとし、ただし『新古今集』の和歌では「境異なる」が死んだことを表すのではなく、距離の離れた状態を言っているとした。

相田満氏は発表者が取り上げた『芸文類聚』『初学記』のといった類書が、中世の学問においてどれほどの影響があつたのかという点への発表者の姿勢を問い、また『遊仙窟』の仮名文学への影響を疑問視しつつ、一方で『文選』などの他の漢籍において「境」がどれほど一般的であつたかということについて質問した。発表者は藤原定家が『文選』を踏まえていたこと、白居易作品との関連があつたことを答えた。